

# 丘博士の生物学的的人生社会観を論ず

大杉 栄

一

たしか僕が十九か二十の時だっただと思う。かねて欲しくて堪らなかつた『進化論講話』を漸く手に入れた。実際丘博士の本を買う時には、いつも此の『漸く』がつきまとうので困る。五号（ポイント）活字にでもすれば四五十銭かせいぜい七八十銭の本になるものを、四号（一四ポ）か三号（一六ポ）かの大きな活字で組んで、二円五十銭、三円五十銭と云う恐ろしい高い（当時米一キロが一〇銭）本になる。出版社や著者には其の方がいいかも知れないが、貧乏書生にはやり切れたものじゃない。が、とにかく此の『進化論講話』は、当時新刊で評判の高かつた本だ。早速読み始めた。面白くて堪らない。一行毎に、まるで未知の、すばらしい驚異の世界が、目まぐるしい程に眼の前に展げて行く。とうとう其日の一と晩のうちに読みあげて了つた。

1 僕はそれまでも随分いろんな本を貪り読んだ。小説にも耽つた。心理学とか、哲学とか、社会学とかの、当時の僕にはまるで分りもしない本にまでも嘔りついた。何んでもいい。ただ無茶苦茶に何にか読みたかつたのだ。何にか知りたかつたのだ。しかしどんな本を読んでも、本当に何にか

読んだ、何にか知った、何にか掴つかえたと言いう、はつきりした自覚や可よかりの満足まんじつのあつた事はなかつた。現いまに其頃読んだ本で、今でも其の内容そを覚えていると言いう程ほどのものは、殆ほとんど一冊いっさくもない。

そして此の自覚と満足とを始めて僕に与あたえてくれたのが『進化論講話』であつたのだ。四五日の間僕は、夜も昼も、殆ほとんど夢中むちゆうになつて進化論の事ばかり考かんえていた。そして、それから一ヶ月ばかりの間に更に三四度繰返して読んだ。読めば読むほど面白い。周囲しういが明るくなる。自分が急に大きくなつたような気がする。僕は自分だけで此の面白味おもしろさを占めていゝ事が出来なかつた。会あう友人毎ごとに、本の内容を話して、是非ぜひ読よむようにと強しむようにして勧めた。本も、次ぎ次ぎに、時としては矢張り強やいしるようにして、幾人かの友人に貸してやつた。

僕は今、丘博士の生物学的人生觀及び社会觀を論ずる前に、是非ぜひともこれだけの僕一個の私事を語る事を許ゆるして貰もらいたい。それによつて僕は、始めて僕に実じつりある読書の味を知らしめ、同時に始めて僕を生物学と云う等しく又実じつり多い新科学に導き入れてくれた博士に、心からの感謝の意を捧たげたいのだ。

それに、考かんえて見れば、これは強あちなに僕一人だけの私事ではない。僕が中学校で教おつた博物学か動物学かの本は、たしか矢張り博士の手になつたものだ。されば僕と同時代若もしくはそれ以後の多くの青年は、博士によつて博物学若もしくは動物学の手引きをされたと共に、更に博士の其後の著書によつて、僕ほどの幼稚でないとしても、少なくとも僕のに似た感謝を博士に負おうかつてゐる筈はずである。丘博士は、日本に於おける広ひろい科学界かぎんがでの、殆ほとんど唯一たがひの科学思想普及者である。博士は、其その専門の生物学を単に実験室と教室とのみに閉じ籠こめて置く代かわりに、それを興味深い通俗な筆致で一般社

会の間に公開した。そして其の生物学としてのみ説く代りに、更に進んでそれと人生社会との密接な交渉を論じた。科学と人生。これ僕が久しく科学者に聞かんと欲して、しかも丘博士以前の、殆んど誰れからも遂に聞く事の出来なかつた好題目である。僕等は争うて博士の著書を読んだ。博士のどの著書も瞬く間に数版を重ねた。博士によって、生物学又は進化論の何んたるかを知り、且つ其の生物学又は進化論から観た人生社会の真相を悟り得たものが、僕等青年の間に幾千幾万あるか知れない。それに博士の読者の中には、博士の地位(高等師範学校教授)の上から、多くの小中学校教師が含まれている。博士の著書は、それ等の読者を通じて、来るべき世代の無数の青年にまでも其の影響を及ぼしている。僕等は、博士の事を語る時には、何によりも先ず、僕等自身の此の啓蒙を博士に感謝しなければならぬ。

しかし、斯くして最初は博士の所説を丸呑みにして教えられていた僕等も、博士の懇篤な指導のお蔭で、漸く博士の所説を多少の批評を加えつつ読むようになった。そして遂には、博士の観察や推理に往々粗漏があり、矛盾があり、曖昧があり、誤謬があるとまで疑うようになった。現に僕は、僕が勧めて博士の著書を読ませた小学校教師及び其他の青年の多くから、屢々博士に対する疑問を聞かされているので、僕は先ず博士の忠実な弟子の一人として、博士に教えられたままの研究法と物の見方とから出発して、博士の所説に対する僕自身の疑問を提出して見たい。そして僕は、博士が其の弟子の一人の恐らくは幼稚な、しかし真面目な質問を容れ、且つそれに再び懇篤な教えを垂れんがために、多忙な研究と業務との中から多少の時間を割いて貰えるものと信じている。

丘博士には、『進化論講話』の外に、『人類進化の研究』、『人類の過去現在及未来』、『生物進化論』、『進化と人生』、及び『生物学講話』の著がある。しかしこれ等の何れの著書にも、又其の中の何れの論説にも、一貫した博士の根本的態度とも云うべき二つの主張がある。それは、科学者としての博士の科学的研究法と、生物学者としての博士の生物学的の物の見方との力説である。これが博士の思想の一切の出発点である。博士の忠実な弟子の一人たる僕も亦、矢張り此の二つの根本的態度から出発する。そして僕は又、博士の忠実な弟子の一人として、博士の所論を觀るのに、出来るだけ博士の言葉そのままを、しかも出来るだけ丁寧ていねいに、引用して行きたい。

『学問の中にも、研究の方法を標準として分けて見ると、確かに二組の区別がある。第一の組に属する学科では、経験に重きを置かず、専ら人々の持つて生れた推理力のみによって、先きから先きへと理を推して進む方法を用いる。従来もとほの哲学や倫理学は全く此の組に属する。之に反して第二の組に属する学科では、推理力も素もとより用いるが、常に経験に重きを置き、先ず実験と観察とによって、成るべく正しい経験こを成るべく広く集め、之を基として一般に通ずる理法を確かめ、更に理を推して考えを進めるに当っては、必ず実験と観察とによって推理の結論の当否を試験し、略ぼ其の正しい事の見込みがつけば、猶其の先きへ理を推して進む。物理学、化学、生物学等の如き謂わゆる自然科学及び其の応用の学科は総て此の類に属する。これ等の学科では、実験と観察との結果が推理の結論と矛盾する場合には、一と先ず理論の方を差控へ、何故斯かる矛盾が生じたかと追究して、推理の

方法の足らなかつた点を発見しようとする、斯くして理論と實際とが一致した上でなければ、猶其の先きへ理を推して進むと云うような事はしない。』

今時分になつて科学的研究法などを力説するのは、随分時候遅れのような気もする。しかし翻つて僕等の周囲の思想界を見るに、殆んど何処にも、此の科学的研究法を見出す事が出来ない。誰れも彼れも殆んど皆な、アプリアリの推理、懐手的推理、与太的推理にのみ耽つてゐる。殊に近來の欧米に於ける非科学的思想の流行に乗じて、其の無学と無知とを掩わんが為めの、多くの六部爺的論法家がうじやうじやいる。博士の科学的研究法の主張は、決して時候遅れでもなく、無駄でもなく、却つて益々力説されなければならぬ程のものである。

(一) 編註 六十六部。書写した『法華經』を全国六十六箇所の靈場に一部ずつ納める目的で、諸国の社寺を行脚遊歴する行脚僧のこと。

次に『生物学的の物の見方とは如何なる見方かと云うに、一言で言えば人間を生物の一つとして見る事である。即ち人間を他の生物とは全く離れた一種特別のものとして、単に生物の一種と見做し、人間社会の現象をも生物界の現象の一部と見做して觀察するのである。それには先ずバクテリアの如く簡單微細な生物から猿人類の如き高等なものまでを一個所に集めたと想像し、全部を見渡しながら其の一部なる人間を見るようにしなければならぬ。之れを芝居に譬とえて見れば、バクテリア、アメーバ等より猿、狸々に至るまで、総ての生物を一列に並べて舞台の背景とし、其の前へ人間を引出して浮世の狂言を演ぜしめ、自分は遠く離れて、棧敷から見物している氣になつて公平に觀察するのである。』

『総て物は見方によつて種々異なつて見えるもので、同一の物でも、見方を変えると、全く別物かと思われる程に違つて見える事もある……一方から見のみで、他の方から見ることを忘れては、決して正しい觀念を得る事は出来ない。之れは素より明かな事で、従来とても、何にか事を調べるに當つては成るべく各方面から見るように注意していたように見受けるが、此処に一つ今日まで全く忘れられ度外視されていた見方がある。それは即ち此の生物学的見方である。我等の考えによれば、人間社会に起る百般の出来事を正しく觀察するには、是非とも此の見方を加える事が必要で、之れを省いては到底皮相的にとどまるを免れない。特に人間の行為を対象とする倫理教育学の如き謂わゆる精神科学に於ては、今後時代の進歩に伴う為めに大に此の見方を奨励する必要がある。』

此の主張も、科学的研究法の主張と同じく、陳腐と云えば云えるのであるが、矢張り僕等の周囲の思想界では、例の奇妙な生存競争説以外には、殆んど少しも行われていない。何事も人間はただ人間としてのみ、人間社会のことはただ人間社会の事としてのみ、例の懷手式に思索され評論されている。少しく他の動物の生活を調べて見れば、直ぐに、はつきりと分るような事にまでも、俺れはこう思う、俺れはああ思う、だけで議論を進めている。更に甚だしいのになると、其の人間なり人間社会なりとしてのみ観て、其の過去の歴史を少しも顧みないのがある。

(一) 編註 手をふと、ころに入れてじつとしてゐるように、人に任せて自分は何かしないことを云う。

そこで、こんどは、丘博士が此の科学的研究法と生物学的の物の見方とによって、如何に人生社会を觀たかと言う問題になる。

博士の『進化と人生』は博士の他の何れの著書よりも、今云った博士の根本的主張と其の人生社会に対する適用とを最も明白に現わしたものである。そして本書には、科学思想普及者としての博士と同時に、一個の科学的思想家としての博士を觀察し批評するのに、主として此の『進化と人生』に拠つて行く。前項の引用も矢張り其の本からの抜き書きである。

序でに一寸書き加えて置くが、博士の著書の中には、二度の勤め、三度の勤め、若しくは四度も五度ももの勤めをしている論文が非常に多い。丁度学校での毎年の講義のように、一著書毎に同じ題目の同じ内容のものが幾度となく繰返えされる。そして前に云った通りの、いつも篋棒に高い本だ。まるで読者は、無法と云つてもいい程の高い月謝を払わせられて、落第ばかりしているようなものだ。博士の根本的思想は、生物学者として当然の事であるが、其の多くの著書の題目を見ただけでも窺われる如く、進化論である。生存競争説である。博士は、此の両刃の劍を提げて、科学的研究法と生物学的見方との冴え切った腕をふるいながら、人生社会そのもの及び其の有らゆる方面に斬りこんで行く。斯くして得た博士の最後の結論は、人類の滅亡である、人生社会に対する痛烈な諦めである。そして博士は此の諦めの中に在って、静かに絶望的努力を説く。『凡そ物が亡びるには二通りの原因がある。一つは外に在って外から働く原因で、他は内に生じて内から働く原因である。』

『地質学上の各時代に優勢の地位を占めていた諸種の動物が、後に至り忽ち亡び失せたのは、決して単に他の種属の為に攻められて負けた訳ではなく、寧ろ其の亡びる原因が内部に生じたのに因る。

そして其の内部に生じた原因と云うのは、即ち初めの其の種属をして総ての他の動物に勝つて優勢の地位に達せしめた原因と同一のものである。』『或る動物は身体の大きく筋肉の強い事によって他の種属に打勝ち、或る動物は武器の鋭い事によって他の種属に打勝ち、其他それぞれ異なつた方面に優れた所があつたために優勢の地位に達し得たであらう。……しかし大きくて力の強いと云う事は、確かに生存競争上都合の好い性質ではあるが、また生活に多量の食物を要する事、成長に長年月を待たねばならぬ事、蕃殖の遅かるべき事、動作に敏捷を欠く事、其他猶種々の不利益な事が必然に附帯して来る。また牙や角の大きく鋭い事は、之れを用いて敵を倒すには無論極めて有利な性質であるが、之れとても牙や角だけが単独に発達し得るものでなく、之れを載せる為めの頭骨や顎骨も、之れを運用すべき筋肉も、其の筋肉を養うべき血管も共に発達せざるを得ず、それだけ其の動物の負担が重くなる。斯くしてこれ等の性質も一定の度を超えれば、却つて生存競争上都合が悪くなる。』

『凡そ或る性質を備えたるが為に総ての他の種属に打勝つて、絶対に優勢の地位に進んだ動物は、後には更に其の性質を用いて相互に競争するを免れぬもので、筋肉で天下を取つた種属は後には自己の種属内で相互に筋肉を以て争い、牙で優勢を占めた種属は後には自己の種属内で相互に牙を以て闘う故、益々身体の大きなもの牙の強いものでなければ生存する事が出来ず、斯くして其の種属をして他に優らしめた性質は何処までも際限なく進まねば止まぬ有様となるが、前述の通り、如何に初め生存競争に都合の好かつた性質でも、或る程度を超えると却つて不利益なものとなり、且つ身体が或る一定の生活法に適するように専門的に遠く変化すると、総ての他の方面にはそれだけ不適なものとならざるを得ず、随つてそれだけ融通の利かぬものと成り、遂に益々生存競争上不利益な



地位に陥って、漸次他の種属の爲めに滅されるに至つたのである。』

『さて人類は如何であろうか。人類だけは独り他の動物とは全く違つて、人類をして今日の優勢なる地位に達せしめた脳と手との力により、言語と器械とを使用して、今後も永久限りなく栄え行くであろうか。将たまた他の動物と同一の法則に従つては人類をして、他の動物に打勝たしめて文明人をして野蛮人を征服し得せしめた其の脳と手との働きが、やがて却つて禍をなして、人類をして恰も空に向つて投げた石が降り来る時の如きパラボラ（物放）線を描いて、一刻毎に速力を増しつゝ滅亡の運命に向つて進ましめ居る如き事はないであろうか。』

博士は、此の人類の滅亡を、其の生物学的評論の必然の結果として観ている。そして更に進んで、現在の人類の社会的、精神的、及び肉体的の墮落を詳論して、其の退化の第一歩を指摘している。

博士に拠るに、吾々人類は到底此の退化の勢いを防ぎ止める事は出来ない。吾々はただ、吾々の滅亡のいつ来るのか定まつていないのを幸いに、当分は来ぬものとして、気にかけて生活している外に仕方がない。と同時に又、吾々は此の人類の中に一民族として存在している事を忘れてはならない。『今日の人類は恰も不治の病の初期に罹っている有様で、各民族は未だ軽いながらも到底全快の見込のない不治の病人に比較すべきものである。一個人が不治の病の初期に罹つた場合には、他事を投擲つて安樂に静養する事も出来るが、地球の表面に於ける各民族は、常に互いに睨み合つて、僅かの隙でもあらば相倒そうと待つていたのであるから、専ら病を養うのみに掛かつては居られぬ。必ず外に向つては武備を固めて敵の侮を防ぎ、内は出来るだけの方法を講じ一刻でも病勢の進む事を止めて寿命を長くする事を努めねばならぬ。今後に於ける各民族間の競争は恰も不治の病人が相

闘っているようなもの故、武備の劣つたものが先ず敗ける憂いがあるのは明らかであると同時に、病気の急に進んだものも忽ち敵に倒されるのは疑いがない。されば各民族共に全力を尽して、此の両方面に於て常に他の民族に優るよう努める事が必要である。』

#### 四

博士の此の人類滅亡論は、博士がみずから独自の解釈であると称する古生物学の事実から出発した。そして又、みずから独自の見解であると称している余程お得意のものである。で、僕は先ず、博士の議論の批評にはいる前に、博士の巧妙な論法の一見本として、其の『進化と人生』中の一論文『人類の将来』の一節を、此処に抜き書きして見た。そればかりではない。博士の人生観と社会観との殆んど全部が此の一論文の中に含まれているのだ。

博士の弟子たる僕は、まだ博士の如くには、人類の将来如何を論ずるだけの、十分な準備がない。又、博士の謂わゆる『健康なる人の常態』として、『来るか来ぬか分らぬ危害』、或は『来る時の定まらぬ危害』には、『氣にかけずに生活している。』従つて此の点に就いての博士の議論の是非を云う大した資格もなく又興味もない。僕の持つているものは、ただ、博士の此の議論の出発点から到着点に至る行程に就いての疑問である。此の議論の中に含まれている諸種の人生観及び社会観に対する等しく又行程に就いての疑問である。

しかし僕は又、それと同時に、此の論文と他の論文との間の見逃すべからざる矛盾をも認めている。で、先ずそれを明かにする為めに、もう少し詳しく、博士の所論を觀て見たい。

『人類の起りを想像するに、恐らく今日より何百万年か何千万年かの昔に、其頃生存していた猿類の中の或る一種が、樹上の生活より地上の生活に移り、後足のみで体を支え、直立して歩み、斯くして自由になつた前足を用いて簡単な器械を使い始め、或は石を拾うて敵に投げ、或は枝を折つて敵を防ぐべき棒となし、或は石を打合せて割れて鋭い刃の生じたものは之れを斧又は刀として用い、小さい片は鋏として矢の先に結びつけ、又斯くして石を打合せ或は木を摩り合せているとき偶然火の発する事を屢々経験する間には、遂に自由に火を造る方法を覚え、随意に火を用い得るようになった以上は、之れによつて土器を焼く事も出来、次ぎには鋳物を熱して青銅、鉄さえも採つて種々の武器を造り得るまでに進むであろう。が、此の程度まで進んだ以上は、最早人類の敵として恐るべきものは一つもなく、自分に危害を加える獸類は悉く退治し、自分の種属は漸々蕃殖して全世界に拡がり、終に戦と云えば人類相互の戦のみを意味する今日の有様までに進み来つたのであろう。又斯く手を用いて為る事が進歩する間には、経験の重なるに連れて、脳の働きも速に發達し、終には困難無形の事柄をも抽象的に思考するまでに進み来つたのであろう。』

斯くの如く脳と手との力によつて、又其の用いる言語と器械との力によつて、人類は今日の優越な地位に達したのであるが、此の力の發達に伴つて人類社会にどんな事が起つたか。博士は、何によらず、私利私欲の勃興と其の結果とを説いている。

『凡そ器械を用いる以上は所有権と云うものが生じ、財産なるものが現われ、同時に財産を貸して利子を取る制度も起るが、その必然の結果として、終に貧富の懸隔が甚だしくなり、富めるものは益々富み、貧しきものは益々貧しく、一社会の中に遊びながら贅沢の極を尽す少数の極富者と、如何

に働いても生活に必要な衣食さえも充分に獲られない無数の極貧者とを生ずるに至る。西洋諸国では今日既に此の有様に達しているが、世の進むに従い此の傾向は益々烈しくなるに違いない。金の有りあまる富豪と、生活の爲めには如何なる恥をも忍ぶ貧民とが並び存すれば、其の間に宜しからぬ現象の起るは当然の理で、之れのみでも世道の頹廢、人心の墮落の原因としては充分である。』

そして博士は、謂わゆる文明の弊の源の中に、更に此の『世道の頹廢、人心の墮落』の現状を詳細に論じて、『我國の将来を考えると寔に憂慮に堪えぬ次第である。世道とか人心とか品性とか人権とか云う議論の喧しいのは、皆な世の墮落している証拠で誠に情けない事ではあるが、又一面此の墮落を憂うる人の猶多少世に存する徴と見做せば、聊か心強い如き感じも生ずる。』と志士の憤慨を洩らすと同時に、併せて其の救済策の暗示にまで及んでゐる。

斯くして博士は、人類の退化と滅亡とを説く予言者の地位から、急に社会革命家の地位にまで降つて来た。

『凡そ一つの弊を改めようとするには、先ず其の因つて起る真の原因を究めて、之れを除く事を図らねばならぬ。若しも其の原因を究める事を忽にし、真の原因でもないものを原因であるかの如くに思い誤り、之れを基として矯正の方法を講ずる如き事があつたならば、其の結果はただ世を益せぬのみならず、或は民族発展の上に取り返しのかね妨害を生ずる事がないとも限らぬ。』

『然らば文明の弊なるものの真の原因は何に存するかと云うに、我等の考えに依れば、主として社会の制度、特に財産に関する制度に欠点があるに因る。』

『我等は決して現今の財産制度を悉く有害と考えるのではない。……今日の財産制度の中で社会的

生活に適せず、随したがつて人心墮落の原因となるものは、唯ただだ土地、物品、金銭等を貸して個人が利子を取ると云う制度である。』

博士は、其その『動物の私有財産』の中に、動物の私有財産制と人間の私有財産制とを比較研究して、其その異同と得失と優劣とを論じた。其その結論の大体に云う。第一に、私有財産を獲えんとする為め相互の間に劇はげしき競争の起るを免がれぬは、人間でも他の動物でも全く同様である。第二に、私有財産の不平等なる事、及び其その不平等ならざる可べからざる理由も、人間と他の動物との間に少しも相違はない。第三に、私有財産の相続は、動物では子の代までに限る。それも、単に其その子が一通り生長して生存競争場裡へ打って出られるようになるまでの養育費を出る事が無い。第四に、人間社会にのみ存して他の動物には決してない特殊の財産制度は、物を貸して利子を取る事である。

『人間と他の動物との財産制度上の相違の点は、主として子孫が親の遺産の恩沢に浴する程度の相違と、物を貸して利子を取る制度の有無との二つである。しかし若もし利子を取ると云う制度がなかったならば、如何いかに刻苦勉励しても、今日の富豪の有する如ごとき莫ばく大だいの財産を一代に造る事は到底不可能である。たとえ巨万の財産を積み得たとしても、子孫が働かずに食い減らせば、忽たちまち消滅する故、数代も数十代も後の子孫までが懐手で贅沢に暮らせるといふ事は無い。されば人間と他の動物との財産制度上の相違は、詰るところ利子を取るか取らぬかと云う一点に帰する。』

そして此の相違は、人間は動物と違って、何にをするにも単に手足の如ごとき身体しんたいの或る部分の外なほに猶なほ道具を使う事に基因する。人と道具との二つが揃そろって始めて仕事が出来る。若もし或る一人が他人から道真を借りて何物かを収獲し得た場合には、これに対して相応の報酬を贈るのは当然の事と思われる。

斯くして、問題は再び、人類の進化即人類の退化の第一原因にまで帰る。そして博士は、人間の根本的性質と云うもう一つの原因を其の間に挾めて、益々問題を複雑にしている。

『元來人間には他人の迷惑は少しも顧みぬと云う性質が生れながらに備っている。……斯かる根性を持った人間が集まって社会を成しているのであるから、到底蟻や蜂の如き完全な社会が成立つ理屈がない。若しも人間に聊かでも生れながらにして他人の迷惑を顧みて、己れの欲せざる所を他人に施さぬという性質があつたならば、蟻や蜂の社会と同様な真に協力一致して毫も争いのない社会が出来るのであるが、蟻や蜂の社会の斯く完全であるのは、長い年月を経て多くの代を重ねる間に、自然淘汰の行われた結果として漸々発達し來つたのである故、今日の人間が俄かに斯かる境遇に達しようと思つても、それは到底出来ぬ事である。礼儀作法によつて少数の人々の間に恰も互いの迷惑を顧慮する如き体裁を粧う事は或は出来るであらうが、先祖代々遺伝し來つた脳髓を練り直して、急に本来の性質を改める事は到底不可能である故、まず当分の間は、他人の迷惑を顧みぬと云う此の性質は直らぬものと見做して置く外に致し方はない。』

(一) 編註 『論語』顔淵篇にある言葉「己所不欲。勿施於人。」己れの欲せざる所は、人に施すことなかれ。

然らば人間の此の根本的性質は、如何んとも手のつけようのないものかと云えば、そうでもない。『畢竟人心が墮落したとか、世道が頹廢したとか云うのは、唯だ人間の此の性質を表面に現わす程度が、従来よりも猶一属激しくなつて來たと云うに過ぎぬ。今日までの人間が、他人の迷惑を顧みぬと云う本来の性質を或る程度まで押え隠して現わさぬのは、全く社会の制度に基づくこと故、若し社会

の制度に不備の点があつたならば、此の性質は忽ち激しく現われ出でざるを得ない。イギリスの或る政治家の云つた言葉に、政治の要は容易に悪を為し難き社会を造るにありとあるが、人間の此の性質が到底直らぬものと定まつた以上は、社会の制度の方を充分に研究して其の欠点を調べ、若し為し得べくば之れを改めて、人間の此の性質の劇しく現われ得ぬように社会を造らんと務める外に道はないであらう。』

そこで博士に拠るに、一、人類進化の原因そのものが、即ち手と脳との発達に更に逆転して人類退化の原因となつた事、二、人類の根本的性質即ち利己心、及び、三、社会制度特に財産制度の欠点と云う三大原因が相錯雜して、人類を退化と滅亡とに導きつつあるものの如く信じられる。そして博士の此の推論の間には、絶えず例の生存競争説がつきまといつてゐる事は云うまでもない。

## 五

丘博士の批評をするつもりで、つい其の議論の解説に予定の紙数の半ばを費して了つた。此の調子で行くと、あとの半ばも、矢張り解説だけで済んで了いそうだ。博士の取扱つた問題は甚だ大きく且つ広い。そしてどの問題でも、其の間の相互の密接な聯絡があつて、一つ一つ離して見る訳に行かない。それに内容は面白い。論法は巧妙だ。解説し始めると、其の解説の興味だけでも、あれもこれも入れたくなくて限りがない。

しかし前項までの解説で、博士の生物学的な人生観及び社会観の中心思想だけは大体分かつたようだ。そして又、前項の解説の結果は、漸く僕をして博士の議論の批評にはいる事を得しめる糸口にま

で導いてくれたようだ。即ち、博士の謂わゆる人類退化の三大原因と、更に其の根抵に横わる生存競争論とを分析し批判する事によって、ほぼ僕の目的が達せられるようだ。

で僕は先ず、僕の第一の質問を博士に提出する。此の人類退化の三原因は、其の間にどれだけの交渉があり、又其の中のどれが最も重大なのか。

一切の事物は、其の事物みずからの中にも亦其の相互の間にも、必ず相紛糾した多少の複雑さを持つている。素より一本調子で見るとは行かない。其の相紛糾し相複雑した一つ一つを離して、更に其の相互の關係を明かにする事によって、始めて其の事物の真相が分かる。科学の任務と云うのも要するにこれである。

博士は其の謂わゆる人類退化の原因を三つに分けた。しかし、斯く分け離して見ただけで、其の間の相錯雜した關係を殆んど説いていない。人類が他の諸動物に優越して進化するに至った原因そのもの、即ち手と脳との発達が、人類退化の根本的の且つ最も重大な原因であるようにも思われる。又、此の手と脳との発達から生じた道具の貸借による利子、即ち社会制度の欠陥が、本質的の且つ更に重大な原因であるようにも思われる。そして又、社会制度は人間の根本的性質そのもの即ち利己心から、必然に此の欠陥を生ずるもののようにも思われる。しかし又、人間は其の手と脳との発達によって、此の社会制度を改善し、人間の根本的性質を圧さえ隠くし、従つて先きに同じ手と脳との発達から生じた一切の弊害を除き去る事が出来るようにも思われる。要するに何んの事だか少しも分らない。そこで、博士の大体の論旨と全く矛盾するらしく思われる此の最後の点を取つて、もう一度博士の著書に帰つて見る。



『進化と人生』中の人類の滅亡を説いた『人類の将来』に拠つて、手と脳髓との発達から人間社会にどんな事が起つたかと見るに、第一に、というよりも寧ろ殆んど全く、財産制度の欠陥及び其の弊害のみを説いている。尤も、器械を用いる結果、人間の生活が漸次に自然の状態に遠ざかり、従つて其の身体が自然に対する抵抗力を減じて、益々人間が懦弱になると云う事も説かれてはいる。しかしこれは、次ぎに云うが如く、博士自身も他の場所でも其の救済法のある事を白状している。

『人類進化の研究』の中に、『人類に対する自然の復讐』と題する一章がある。自然には一定の理法がある。これを破るものは必ず罰せられる。森林の濫伐は河川の洪水を、小鳥の濫獲は毒虫の繁殖を招く。しかしそれは極く『軽い復讐』で『先見の明』がありさえすれば、直ぐに『償う事が出来る。』又、生物には用不用の理法がある。絶えず使う身体の部分は次第に強く大きくなり、常に蔽い隠くして用いない部分は次第に弱く細くなる。人間は火を点す事を知つてから、火食の結果胃腸を弱くした、着物を着て皮膚を弱くした。前の復讐に較べれば此の方は少し『重い。』しかしこれとても、『人間の智慧の働きによって防ぎ止める事は出来る。』

然るに『自然の復讐の最も劇烈な最も惨酷なのは、人間の社会生活の不条理の点に起因する。之れは人間の自然の征服に対する直接の復讐と云うよりも、寧ろ人間の社会制度の欠点に附けこむ間接の復讐とも云うべきもので、社会の制度が今日のままで続く限りは到底防ぐ事は出来ぬ。』

其の一例を挙げれば、『富者は益々富み貧者は益々貧しくなる今日の世の中では、学者が折角汗水流して研究し発明した事も、唯だ富者のみが之れを利用し、貧者は却つて其の爲めに更に困難に陥り易い。蒸汽機関でも、水力電気でも、人間の爲した自然の征服としては最も立派なものであるが、

後より見れば、貧富の懸隔を甚だしくする為めに特に造られたかの如き観がある。』又、年々諸種の疾病や罪悪が殖えて行くのも、『其の遠い原因を探れば、社会制度に欠点がある事に構わずに、智慧に任せて自然を征服したからである。』

博士の議論の面白さに引きずられて、其の次ぎの『精神的思想的方面の自然の復讐』と云う一項からも、次ぎの十数行の引用を許して貰いたい。

『仮りに此処に一つの国があるととして、其の国の最高の權威を握り得た少数の人間が、全国民に斯様斯様の事を信ぜしめるのが自分等の為めに都合が宜しいと考えた事を、有らゆる方法を用いて強制的に人民に信ぜしめ、少しでも之れと異なつた考えを發表せんと試みるものがあれば、直ちすれば、其の国は如何なる状態に陥り、又将来如何に成り行くであろうか。』

『凡そ世の中の進むのは自由研究の結果であつて、研究が自由であればある程、その成績も著しく、進歩も早い。若し或る方面に自由研究を禁ずれば、其の方面の進歩も止まる。そして猶他の方面へも影響する。遂に国全体の進歩が止まる。研究の自由な隣国とは競争が出来なくなる。』

『知力が進み脳髓が發達すれば、それに伴うて、常に新しい思想の生じ来るのは自然の働きである。権力者が一定の信仰箇条を造つて、これを強制し、思想の進歩を止めるのは、即ち人為を以て自然の働きを押し止めるのである。一時は自然を征服し得たるが如き有様を呈しても忽ち自然の復讐の結果が現われて、早晩自然の成行きに従う時代が来る。』

そして博士は、更に『触れば崇る神を祭つた天罰』を説いて、其の結末に、突然行を変えて『斯く考えると、憲法によつて信仰の自由を保証されている文明時代に生れた我々は、何んと幸福ではない

か』と空うそぶいている。

其他、博士が其の謂わゆる人類退化の原因として、社会制度の欠陥を頗る重大視した箇所は、博士の著書の殆んど到る処に見出される。そして、先にも引用した『謂わゆる文明の弊の源』の如きは、『凡そ一つの弊を改めようとするには、先ず其の因つて起る真の原因を研究して、之を除く事を図らねばならぬ』と云つて、其の真の原因を社会制度の不備に帰し、更に其の根本的改革を暗示したものである。

これ等の諸論文に拠るに、人類の退化は、ただ其の手や脳の力を悪用し濫用した結果であり、又其の悪用や濫用を激成する社会制度の結果である。従つてそうとさえ分かれば、更に手や脳の力を善用し直し、又其の善用を誘導する社会制度に造り直して、此の退化の勢いをとめる事が出来ると云う論旨としか思えない。

## 六

斯う見て来ると、博士の説は、大ぶ社会主義者のそれと似て来る。社会主義と雖も、博士の所説と同じく、一切の私有財産を否認するのではなく、博士の謂わゆる利子の取れる一切の生産機関の公有を主張するものである。社会主義は、博士の『動物の私有財産』の中にあるが如き、猿の頬囊の中に詰めこまれてある人參や、犬の寢床の下にある喰いかけの牛の骨や、鳩の食道の中途にある餌囊の中の豆や、駱駝の胃の周囲にある小囊の中の水の、私有財産を批難するものではない。

其他、博士が現代社会の腐敗や、謂わゆる世道の頹廢や、人心の墮落を慨嘆して、其の根本的原因

に触れない道德、宗教、慈善、及びあらゆる部分的改良手段の無効を痛論しているあたりはどのペー  
 ジを開いて見ても、大ぶ社会主義者の口吻に近い。殊に次ぎに引用する比喩の如きは、アメリカの社  
 会主義者ベラミーの名著『百年後の新社会』の中の有名な比喩と全く符合する。

『一人を富豪とならしめる為めには、数百万人が其の犠牲となつて貧苦に陥らねばならぬ事は計  
 算上明らかな理である故、一方に少数の者が巨万の富を積む間には、他方に於ては幾千万の人間は  
 漸々貧困と餓に迫られては段々安い給金にも甘んじて、牛馬の如くに労働せざるを得ず、終には露命  
 を繋ぐ事さえ容易でなくなる。斯かる状態の世の中は、之れを他物に譬とえて云えば、恰も贅沢華美  
 を尽した重い馬車に少数の客を乗せ、数百千人のものが馬の代りにそれを挽いたり押したりして坂  
 路を登つて行くようなものである。』

『現時の世の中は略ぼ斯かる有様である故に、之れに対して不満の聞ゆるのは当然の事で、毫も  
 怪しむには足らぬ。車を挽くものが車上の客を眺めて、彼れも人なり、我れも人なり、特に我れの方  
 が筋力も知識も彼れに比しては遙かに優等である、然るに彼れは斯く安楽に贅沢に暮し、我れは斯く  
 喘ぎ苦しまなければならぬのは如何なる理由に由る、かと考え出しては、一刻も不平なき訳には行  
 かぬ。』

『それ故、今日孰れの文明国にも、斯かる議論の起らぬところはない。虚無党と云い、社会党と云  
 い、アナーキストと云い、イルレデンタと云い、名称も種々で理想とするところも様々ではあるが、  
 現代に対する堪え難き不満の念が凝り固まつて終に表面に現われたものなる事だけは同じである。』  
 そればかりではない。一時優勢を極めた古生物が如何にして滅亡したか、この問題に就いて、博

士は其の独特の原因を発見した。そして其の発見を生物進化の上の一理法として人類社会の将来にまで適用した。これ又、殆んど不思議な程の、博士と社会主義との符合である。社会主義者は、一時ヨーロッパの全思想界を風靡したヘーゲルの弁証法、即ち正 (thesis) 反 (antithesis) 合 (synthesis) の進化的理法を其の推理の最高の形式として採用した。一切の事物は其の勃興の原因 (正) そのものの中に、其の亡滅の原因 (反) を含み、斯くして亡滅する間に更に新しき事物を生ずる (合)。宇宙の万物は此の正反合の循環的進化に従う。社会主義者は、有らゆる自然科学の上の此の弁証法的事実と理法との新発見を学び、更にそれを現社会の資本家制度の上に適用して、其処に始めて彼等の謂ゆる近世科学的社會主義を建設した。

ここに一寸お断りをするが、僕は此の謂わゆる近世科学的社會主義者ではない。社会主義者の弁証法にも、又其の社会現象の上への適用にも、多少の疑問を持つてゐる。それに今は社会主義の紹介をするつもりでは毛頭ないのだから、此の議論はいい加減にして切りあげる。

然らば博士は、其の独自の生物進化の理法を提げて、嘗て人類の過去現在及び未来に切りこんで行つた如く、更に同様の社会制度の過去現在及び未来にも切りこんで行か、又、切りこんで見た事があるか。そして其の結論が全く社会主義者と同一になるか、又なつたか、どうか。これは大に面白い問題だろうと思う。同一の科学的研究の方法を以て、同一の進化的推理の形式を以て、同一の問題に当面するのだ。斯くして博士は、其の議論の社会主義的に見られる所々に殊更らしく公言している。社会主義嫌いを、始めて本当に明確にする事が出来るのだ。

もう一つ、そればかりではない。博士は更に進んで其の無何有社会的理想を説いている。『進化と

人生』の中の『理想的団体生活』を見よ。

『斯様な動物の生活状態を詳かに観察して見ると、多数が力を協せて、誠実に全団体の維持繁栄の爲めに働いている有様は実に理想的と称すべき程で、我々人間の如き不完全な団体生活を為すものから真に羨ましく思われるものがある。』

『先ず苔虫類の国を見て、第一に氣のつく事は、国内に一疋として無職業のもの、働かぬものない事である。……食物に剰余の生じた場合には、総て之れを一国全体の所有として適宜に利用するのみで、決してそれを別けて一疋ずつの所有を定める如きことはない。……貧富の区別もなく資本家と労働者との区別もなく、富の圧制もなければ貧の苦しみもない。……多数集っている個体の中には、神経筋肉ともに、多少の優劣のあるは免れぬが、優者は優者だけに、劣者は劣者だけに、それぞれ其の分に応じて国の爲めに働くのみで、……又其の職業による貴賤尊卑の区別がない。』

『以上の事は暫く措くとしても、我等が苔虫の国を見て、真に羨ましさに堪えぬのは、国内の各個体間に少しも争いのない事である。私有財産が無い位であるから、各個体が相争う理由が少しもなく、相互に己れの欲する所は他に施し、己れの欲せざる所は他に施さぬ。……罪惡を防ぐ爲めの設備は毫も入要がない。修身道德と云うような事は彼等の国民には何の必要もない。……』

『斯く苔虫の国には、罪惡がない故罪惡を未然に防ぐべき宗教道德が入らぬと同じく、罪惡を未然に制すべき法律も全く必要がない。随つて法律に關係したものは一つも入らぬ。……裁判官もなければ弁護士もない。……また罪惡の無い世の中には警察は全く無用であり、政府なるものも殆んど用はない。』

そして博士は、其の間に『我等は長く苔虫類の生活状態を見慣れた結果として、往々自身を苔虫の地位に置いて、人間界の出来事を観察する習慣が生じ、何事を見るに当つても苔虫の見地から批評を下すを禁じ得ない場合がある。帝都（首都）の中央に大審院や司法省の大夏高樓（大きい高い建物）が巍然として立っているのを見、又それを写真に取り絵葉書などに造って誇っている世上の有様を見て、斯かる立派な建築物を要するほどに司法事業の繁盛するのは、誇っていい事か恥じていい事かなどと考え、偶々其の近傍を通行する際には虫の思わん事も恥しなど、思わず独語する事がある』と洒落れている。斯く博士の議論の中には、先きに云つた志士の憤慨と、此の種の犬儒的冷笑とが充ち満ちている。

- (一) 編註 大審院は、明治憲法下での最高の司法裁判所。現在の最高裁判所に当る。司法省は、現在の法務省  
 (二) 編註 犬のような乞食生活をしたといわれる、ソクラテスの弟子であるアンティステネスを祖とするヘレニズム期の古代ギリシアの哲学の一派で、実践的で諦観をもった倫理思想を主とした学派。シニカルの語源となった。

しかし、『総て理想的と名のつくものは一として直ちに実現せられ得べきものはない。……苔虫類に見る如き完全なる団体生活は、現在の人間に取っては到底不可能である。若し今日直ちに苔虫類の如き理想的社会を造ろうと思うものがあつたら、それは人間生来の欠点を忘れた僭上の沙汰と云わねばならぬ。……しかしながら、理想的なものは向上の目標としては必要なもので、之れによって日々の進歩の方向を定める事の出来るもの故、動物の中には斯かる理想的の団体生活を為している種類がある事を承知して置くのは、一身を修めて行くに当つても、社会の制度を改良するに当つても、一つの参考となり、又目標ともなるであらう。』

## 七

これを要するに、博士が切りに詳説し強調する人類勃興の原因そのものが直ちに其の滅亡の原因となると云う謂わゆる博士独特の発見は、博士自身の暗示する他の一面即ち社会制度の改革と云う事によつて、殆んど全く若しくは少なくとも著しく其の価値を減ぜられる。

理想は、直ちに実現され得ない。しかし、直ちには又現在の人間には不可能であつても、何れは又将来の人間には実現され得るかも知れない。

然るに博士は、先きにも屢々云つた如く、更に他の一面に於て、人間の謂わゆる根本的性質たる利己心が到底此の理想の実現を許さないと断言している。そして其処に博士の奇妙な生存競争説が現われて来る。

博士の生存競争説には相異なつた二つの方面がある。其の一つは、従来の殆んど総ての進化論者が主張する如く、個人対万人の容赦のない生存競争である。もう一つは、同一種族の各個体が相互扶助によつて結合しつゝ、他の種族に当る矢張り容赦のない生存競争である。生存競争は利己心と排他心とを生み、相互扶助は愛他心と団結心とを生む。そして此の相互扶助は種族の繁栄と優越との重要な一要素である。そして博士の社会的理想は此の相互扶助が行われ得べき社会制度の実現にある。

若し博士の説が単にこれだけの事であれば、何んの奇妙もなく不思議もない。然るに博士は、此の二つの生存競争をこちやまぜにして使うと共に、議論の都合によつて其のどちらかの一つ殊に前



者のみを出すと云う甚だ悪い癖を持っている。そして又、此の生存競争と云う文字に就いても、ダーウインの警戒した広い比喩の意味と、斯くみずから警戒しながらもダーウイン自身が常に誤まり陥つた狭い意味とを、博士は矢張り其の議論の都合によって、どちらかの一つ、殊に後者のみを使うと云う甚だ悪い癖を持っている。

今其の例を挙げれば限りがない。人間が生れながらにして利己心、排他心を持っていると云う事は何人も承認する。『人間の性質として彼れの欲する物を我々が持つか、我々の欲する物を彼れが持つかすれば、忽ち争いの起るは当然の事で、これは三歳四歳の子供等に数種の玩具を与えても明かに知れる。』しかし此の性質があつたからとて、どうして『若しも人間に聊かでも生れながらにして他人の迷惑を顧みて、己れの欲せざる所を他人に施さぬと云う性質があつたならば』などと云えるか。又少なくとも、此の利他心なり団結心なりが後天的に発達しないと云えるか。現に博士自身も、幾度か、他の場所で、利己心の庄へ隠し得る事を説いている。此の矛盾は、明かに、博士の生存競争説の矛盾から来る。

博士の生存競争説に就いては僕は猶、云わなければならぬ多くのものを持っている。又、それを云つて了わなければ、博士に対する僕の質問は本当には徹底しない。なぜなら、僕の見るところに抛れば、先きに云つた博士の人生社会観の中の曖昧と矛盾とは、多くは此の生存競争に就いての観察の粗漏と推理の誤謬とから来る。

『此の程度まで進んだ以上は、最早人類の敵として恐るべきものは一つもなく、自分に危害を加える獣類は悉く退治し、自分の種属は漸々蕃殖して全世界に拡がり、遂に戦と云えば人類相互の戦の

みを意味する今日の有様までに進んだ。』そして将来は益々此の勢が激しくなるに違いない。と云う博士の民族間若しくは人種間の戦争必然論は、博士の議論の中の理論上及び實際上最も重要な結論であるが、これなども、生存競争の意味を極く狭く戦争と云う事にのみ限つて了つた結果ではあるまいか。

しかし僕の与えられた予定の紙数が既に尽きた。僕は結末に急がなければならぬ。

博士に対する僕の第一の質問は、先きに云つた人類退化の三原因が、其の間にどれだけの交渉を持ち又其の中のどれが最も重大であるか、と云う事であつた。僕は、今己むを得ず、僕の質問を此の第一の質問だけにとどめる事とする。即ち博士の結論の曖昧と矛盾とを指摘するだけにとどめる。そして此の曖昧と矛盾とを生ぜしめたとと思われる、次ぎに列挙する諸疑点に就いては、博士の懇篤な示教を待つて更に詳論したいと思う。

果して博士は、何事に対しても先ず『観察し実験して其の事実を確め、似寄つた事実を蒐め、実験によつて出来るだけ広く蒐集し、力の及ぶ限り精密に観察して、寸法があれば物指で計り、目方があれば秤を用い、時を計るならば精確な時計を用い、斯くの如くして微細な点にまで注意して』博士自身の理法を確めて見たか。

果して博士は、此の実験と観察とによつて確められた理法を更に進めて推理する時、其の推理の結論の当否を再び前述の如き精密な実験と観察とによつて試験して見たか。懐手式推理を試みはしなかつたか。『江戸へ来て見た所が毎日非常に風が吹いて往来が砂だらけである。斯う砂が舞えば必ず人々の眼に砂がはいって盲目になる人が大勢出来るであろう。盲目になれば退屈であるから必ず

三味線も弾くに違いない。そうすれば三味線が沢山要るから猫が皆な殺されるに定まっている。猫が皆な殺されれば鼠が暴れ出して箱を残らず噛み傷けるに相違ないから、箱商売を始めたら必ず大繁盛をするであろう」(風が吹けば桶屋がもうかる)と云うような、**膝栗毛**(十返舎一九『東海道中膝栗毛』)の中の六部爺的論理をやりはしなかつたか。

特に人生社会の研究に於て、少なくとも生理学上の事実の研究に於けると同じ心持ちで、博士の主張するが如き実験と観察と推理とを試みる事を怠りはしなかつたか。生物学者たる博士に、同時に心理学者たれ、社会学者たれと望むのは無理であるかも知れない。しかし苟くも一科学者が、よし其の専門以外の科学に就いてであつても、兎に角それを議論するに当つては、矢張り其の専門の科学に対すると同じ心持ち、同じ態度は持たなければなるまい。果して博士に、此の用意に於て欠くところがなかつたか。

人間を一生物として見るのはいい。人間の社会を生物の一社会として見るのはいい。けれども人間と他の動物とを、人間の社会と他の動物の社会とを、全く同一視する傾向が博士には余りに多すぎはしなかつたか。人間と他の動物とを又人間の社会と他の動物の社会とを比較するのに、それ等の前者に余りに重きを置きすぎはしなかつたか。生物学と社会学との境界を忘れはしなかつたか。

そして最後に、博士自身が『進化と人生』中の一編『脳髓の進化』を説いた如き大脳の働きが外界からの影響を蒙つて著しく変わる事に、博士自身の本当の自覚が足りなくなつたか。博士の社会的地位が、それを飲むと如何なる人も忽ち陽気になり上気嫌になつて浮かれ出すと云う亜酸化窒素、一名笑い瓦斯の如き作用を、博士の脳に及ぼしていやしないかと云う事に、博士自身に十分な

反省があつたらうか。

又、一步を譲つて、よし其の反省があつたとしても、博士が其の社会的地位を維持して行きたい為めに、科学者としての良心に背いてわざと議論を曖昧にし、若しくは知らず識らずの間に相矛盾する議論をしているようなところが見出されないだらうか。

『進化と人生』の序文にもあるが如く、『不十分なる経験を基とし、未熟なる脳力を頼んで考えたこと故、足らざる所、誤まれる所も、決して少なくなかろう』は勿論であるが、それにしても余りに不十分、余りに未熟な点が余りに露骨に現われてはいないだらうか。

『凡そ議論なるものが如何様にも出来る事は裁判所に於ける検事と弁護士との弁論によつても明かに知れる』と云うが、検事と弁護士とは最初からの立場が違う。博士と僕との間には議論の相異すべき殆んど何等の必然性もない。僕は博士の忠実なる弟子である。博士の科学的研究法、博士の生物学的の物の見方は、等しく又僕の研究法であり、僕の物の見方である。若し相違があれば、それは主として、実験なり観察なり推理なりの行程に、二人とも間違ひがあるからである。僕はただ此の間違ひを正したいのだ。

猶、博士の生物学的的人生社会観が吾々青年に与えた、そして僕自身が甚だ有益な且つ真実のもの  
と観た、多くの教訓に就いては、更に筆を改めて博士の功績を説きたいと思う。

- 
- 「丘博士の生物学的人生社会観を論ず」（『近代日本思想体系』第九卷「丘浅次郎集」、筑摩書房、一九七四年九月、初版第一刷）所収。
  - 読みやすさのために振り仮名を付加した。
  - 理解を助けるために適宜割註とパラグラフ末註を附した。割註は比較的短い記述に使用し、パラグラフ末註は、やや長い記述に使用した。
  - PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ でタイプセットを行い、`dvipdfmx`を使用した。

- 科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/scilib.html>

- 「科学図書館」に新しく収録した文献の案内 「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiro/meda/bbs>